

アカシア夜話 アカシアンナイト
第4話



被団協事務局長 藤居平一先輩

「償うてくれ!それができないのなら、せめて援護法を!」日本被団協初代事務局長で、被爆者援護の為の運動の先頭に立っておられたのが藤居平一先輩(24回)です。昭和30(1955)年に広島で開催された原水禁世界大会に準備段階からかわり、初期の原水禁運動を語るうえで欠かす事のできない一人として、強烈なリーダーシップを発揮された藤居先輩との思い出を、アカシア会顧問で、事務局長として長く運営を支えてこられた、新井俊一郎さん(41回)に語っていただきました。

あの藤居平一氏との出会い

当時RCC中国放送のラジオ制作部長だった私は、昭和50(1975)年の1月初旬、突然山本満夫専務(24回・のち社長)に呼び出されました。専務はいつものブッキラボウな口調で言いました。「直ちにアカシア会へ出向き、藤居平一君に協力して母校の70周年記念式典の演出を担当せよ。これは私からの業務命令である。藤居君と私は、同級生だ。」こうして私は、かつての被団協事務局長で被爆者援護法の功労者、藤居平一さんと、それとは知らぬまみ出会うことになりました。



新井俊一郎さん

容貌魁偉、大音声の偉丈夫

事務局では既に沢山の人が働いていました。駆け込んだ私の眼前に現われたのは、色黒く見上げるほどの背を反らせて立ちただかる人物でした。その人の特徴ある低音が響きました。「式典と祝宴は4月19日だ。もうあまり日がないし予算も無い。しかし、創立70周年という佳き日であり、盛大かつ感動的な演出を期待する」その時になっても私はなお、この方があの有名な人物だとは気付いていませんでした。ただ圧倒的な迫力と、古武士然とした堂々たる偉容の前に平伏するばかりでありました。

激しくケンカしましたが…

「実行委員に追加任命する」との託宣と共に、式典と祝宴の進行原案なるものを示された私は唾然としました。学校側とアカシア会側の双方から祝辞や挨拶、経過報告などが延々と続き、永年勤続表彰まで予定されていました。これじゃ何時間あっても足りやしない、と今度は私が猛然と反撃に出る番でした。「こんなことじゃ式典など出来っこない」と、猛者、

藤居さんと激しいケンカになりました。

もちろん藤居さんからは、「出来なくてもヤレ」と、ドスの効いた厳命が発せられてケンカは決裂。窮した私は珍案を考えつきました。永野重雄さん(8回)など遠来の名士で間違いなく挨拶が長いと予想される方々は、客席中央に着座を願い、司会者の方からマイクを持って近づき、母校への思いなどを聞き出すという「客席インタビュー方式」はどうか、と恐る恐る藤居さんに提案したのです。

「なにい?」表情が一変しました。これは怒鳴られる、と身構えたたん「見事じゃ、幾多の戦いを生延び現在の繁栄を築いた諸先輩の生きざま、母校への熱き思いを率直に語っていただける。これぞ名プランじゃ」絶賛と共に万事解決がありました。大先輩、親子会員、恩師の声が客席から熱涙と共に会場へ流れることになりました。



藤居平一さん

面目躍如のヒトコマも…

記念式典だから校門に「日の丸」を…との提案が出たのです。もう今や誰がどんな経緯でなど不明ですが、式典開始の直前、当の校門前で時ならぬ論争が巻き起こったのです。

「ならん!」大音声が轟き、黒い顔を真っ赤に染めた藤居さんの姿がありました。以後、今日に至るまで記念式典に日の丸が掲げられることはありませんでした。

必ず慰霊式典と黙祷から

「アカシア物語を完成させてくれ」、折りあるごとに、アカシア会の若い常任幹事に向けて訴え続けた言葉です。国と母校の歴史の中に消えて行った幾多のアカシア会員の生きざまを、なんとかして記録に留めて欲しい、との藤居さんの願いだと私は理解しています。その一つの現われが、毎回、記念式典に先立って行われる慰霊祭です。まだ我が校に慰霊碑が建立されてなかった時代、斎場は大学の慰霊碑前広場でした。そして記念式典自体も、必ず冒頭の黙祷から開始されたのです。やっと母校に慰霊碑が完成した今、そこが式典前の慰霊祭の式場となりました。藤居先輩の思いが少しは果たされたかも、と許しを乞うが如き心境です。

アカシア会、存亡の危機だ!

アカシア会の常任幹事として、常に重機関車の如く運営全般を牽引して来た藤

居さんも、90周年事業では体調不良から表には立たず、代わって石井寛二会長(26回)と千葉論吉幹事長(31回)、事務局長としての私ほか全力疾走しました。

しかし、90周年では学校から初めて寄付金の申し入れがあり、「国立学校だから国庫から当然」との正論が圧倒的のなか、5千万円の募金に踏み切りました。多くの異論と反対意見のなか、アカシア会の将来を最も憂えていたのが、ほかならぬ藤居平一さんでした。募金活動が始まった直後、千葉、新井の両名が急遽、藤居さん宅に呼びつけられたのです。

「寄付金問題の是非もさることながら、万一これに失敗したら間違いなくアカシア会は壊滅する。存亡の危機だ」「頑張ります」と答え、歯を食いしばるのが精いっぱいでした。

「よくやった!」と涙、また涙

初めての学校への寄付金は、苦闘の末達成できました。平和公園内のフェニックスホールを満員にして盛大に、かつユニークな演出で記念事業は完遂されました。直前に発生した阪神大震災にもめげず、全国から多くのアカシア会員が会場に詰めかけていました。その中に藤居平一さんの姿がありました。往年の猛虎の如き勢いは失せ、杖を頼りにホールのソファに埋まった氏は、目ざとく、眼前を駆け抜けようとした私を呼び止めました。「よくやった、大成功だ!」

私は、ソファに沈み込んだ藤居先輩の脇に膝を突き、両手をシッカと握り締めました。藤居さんも私の手を、思ったより強い力で握り返し、ただひたすら「良かった、良かった」と繰り返しながら、互いに涙にくれるばかりでした。平成7(1995)年4月15日でした。

その1年後、4月17日、母校創立91周年の当日、藤居平一さんは享年80歳の生涯を閉じたのです。

編集にあたって

会場に先着されていた新井さんは用意のメモを確認しながら、思い出を語り始められました。準備の周到さがかつての名事務局長の面目躍如でした。今後も変わらず、後進にご教授いただきますようお願い申し上げます。

(本文中、先輩に対する敬称は「〇〇先輩」、「〇〇さん」に統一しました。)

文責・編集：甲斐 稔(63回)

編集補：河本良子(63回)

被団協は日本原水爆被害者団体協議会の略称です。